

穏やかな町づくり

槇 文彦

都市、建築、特に住居は、そこに生息する人間集団が希求する空間秩序の表現であると私は常に考えている。

勿論、時代、社会、或いはその文化によってその空間秩序は様々なかたちで現われ、又変化も続けている。

しかしそれ等が人間集団のものである限り、与えられた状況の中で変りつつあるもの、或いは変らないもの、又変るべきでない空間のあり方について、建築家、都市デザイナー達は充分理解しておく必要がある。

著名な文化人類学者レヴィ=ストロースは一つの原始社会をとりあげて、その集団の家の位置関係のあり方が彼等の地位、行動、そして生活の細々とした規則までを規定していることを示している。紀元2世紀頃、ローマにおいて、増加する外からの人々の流入に対処する為に、初めて集合住宅が出現したという。所謂長家形式の集合住宅であった。その煉瓦づくりの『かた』は今日まで基本的に変っていない。そして様々な物資の移動手段、或いは戦いのことを考慮した『みち』の整備、この二つの要素が所謂今でいう彼らの町の町並を形成していったといつてよい。それでは日本はどうだったのか。封建時代の日本では、城を囲んで武家屋敷、更にその外側に商工の民家が密集したかたちで町が形成されていった。武家屋敷では独立家屋が塀をめぐるし、民家は木造、そして頻繁な火災によって、京都の町家を除いては、みるべき集合住宅の『かた』は発展し得なかった。更に明治維新を契機とする近代都市構造の形成において、町人町の街区、武家屋敷も、人口の増加に対応する方法として、共に内部に向かって細分化されていき、他国のメトロポリスとは全く異なった細粒都市の形成が促進されていった(図1)。そして今日に至る一世紀以上、東京は独立住居と、様々な集合の住居、諸施設が混在する町をつくってきた。それに対して外人、特に欧米人の多くは日本の町並をカオスとしかみなしていなかった。しかしオーストラリアの都市学者、パリー・シェルトンが指摘しているように(註1)、日本の町の秩序は線的にとらえるものでなく、面的に観賞するものであるという。確かに日本の町は車からの視線に対してカオスであっても、散歩しながら一つ一つみていくとき、整然としたヨーロッパの町並には無い面白さを発見出来るのだ。

今回、「竹中工務店-住まいの空間」への寄稿に際し、それでは彼等がどのような姿勢で集合住宅をつくってきたかを、実際に見分する為に、今年一月、一日さいて東京近郊を中心に代表的な

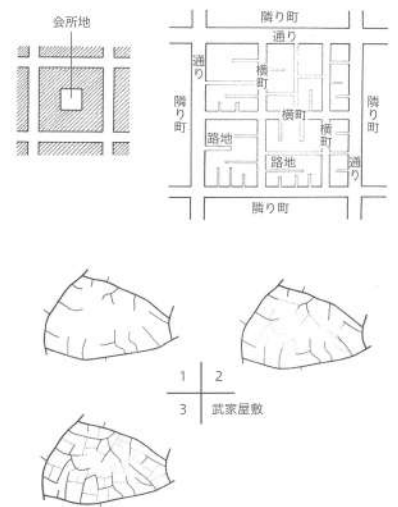


図1



図2 代沢レジデンス

いくつかの集合住宅を案内して戴いた。彼等のデザインが目標としたコンセプトについては同書で水野吉樹氏が精しくのべられているので、重複を避け、私なりの感想をのべることにとどめることのお許しを願いたい。

先ず最も印象の深かった一つにエントランスとロビーのデザインの扱いがあった。これまで多くの集合住宅では自分のユニットの前に立ったとき、初めて自分の「いえ」に到着した感じをもつ。これに対して最初に見せて貰った「QUON南麻布」、「代沢レジデンス」(図2)、「プライド南麻布」(図3)等ではそれぞれ豊かなラウンジによって自分の「いえ」に到着した感じをもたせて貰え得た。更にその一隅に巧みに設けられた小庭から光が射込み、緑がみるものの目を癒して呉れる。特に「プライド南麻布」は広いラウンジのガラス面の開口部を介して前庭に続いて背後のフランス大使館の豊かな緑が目射る。所謂借景である。

この到達の儀式は「GATE SQUARE 小杉陣屋町」(図8)のプロジェクトでは、嘗てそこにあった旧家の陣屋門が到達の儀式を象徴すると共に、中に入るとそこにあった大樹、灯籠、神社等が新しく設けられた庭園と共に、新たにしつらえられた住居群に豪華な外部空間を展開している。もう一つ印象に残ったことはたとえそれ程、大きくない敷地にあっても、住宅ユニットの間に、効果的に光、風通し、そして外部風景が続くオープン・スペースを様々なかたちでとりこんでいるプランニングが多かったことである。「DEN FLAT NANPEIDAI」(図4)では各階に十字型のオープン・スペースを設けることによってそこで区割された四つのユニットは独立住居の様な間取り、通風を可能にしているのである。

更にこの日見学した集合住宅は高さ10mの制限のあるものから始まって、日照、北側斜線制度等の厳しい制限に対し、その中でいかに住み心地のよい内部空間を獲得するかという課題に対して、構造はフラットスラブを採用することによって室内空間のひろがり確保すると共に、敷地条件がよければ各ユニットを少しずつずらすことによって豊かな眺望の開けるコーナー空間を与えている。そしてこのスラブ、或いはその先端に設けられたバルコニーの断面がそのまま白い水平の帯として、階の上下間に広くとられたガラス面、テラス前面の注意深くデザインされた手すりと共に水平性を強調した洗練された外観を与えている。そこに彼等の独特の『かた』をつくり出すのに成功していたと思う。

南平台のプロジェクトはたまたま私のオフィスからあまり遠くないので、もう一度最近昼休みにみにいった。人気こそ少なかったが、この地域では最も美しい集合住宅である姿に変わりはなかった。



図3 プライド南麻布



図4 DEN FLAT NANPEIDAI

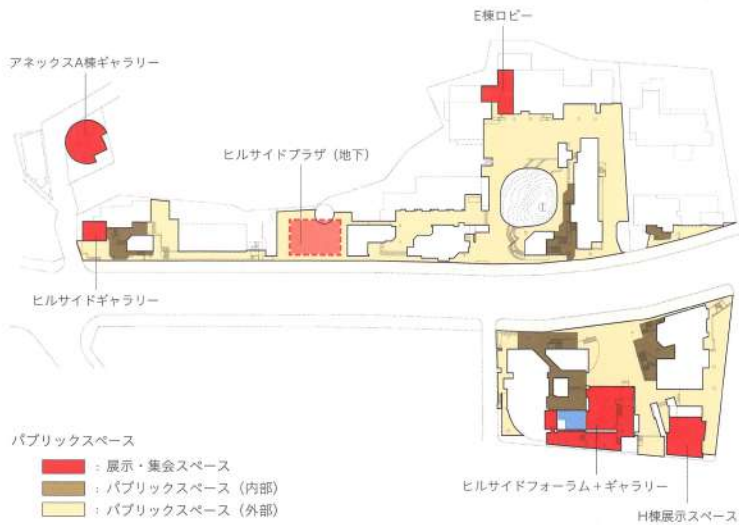


図5

この稿を書くにあたって、もう一つの編集者の依頼は、我々が設計したヒルサイドテラスの経験を踏まえ、我々が集合住宅をどのように考えてきたかについて触れて欲しいという要望であった。周知のようにヒルサイドテラスは1969年に第一期が完成し、その後第六期まで約四分の一世紀かけて少しずつ実現していったスロー・アーキテクチャーである。その間、東京のライフスタイルの変化に対応した様々な住居タイプの開発、そしてギャラリー、音楽ホール、図書室などの文化施設の導入も行われた。そこには、竹中の集合住宅の素晴らしいラウンジも、ユニットの洗練された内部空間も少ない。しかしヒルサイドテラスの特質は地上面に店舗、レストラン、文化施設、住居のエントランス等が展開し、そこへは周縁の歩道から誰もが自由にアクセスすることが出来る。換言すればこの集合体は周縁の町の中に完全にとけこんでいることである。そして独立した住居、施設群の間には様々な性格をもった小さな広場が設けられている(図5)。唯、それだけである。しかし我々がその後、ヒルサイドテラスの様な集合体をつくっていないのは、この様な恵まれた条件下にあるプログラムは現在、東京も含めて日本の町では極めて得難いからである。広い道路と豊かな歩道。それでいて低密度の敷地条件。そして眼前の利益にこだわらない理解ある施主…その理解ある同じ施主のもとで行った、ヒルサイドテラスから500m離れたヒルサイドウエストの計画に一寸触れてみたい。(図6)に示されるように、彼等が別の機会に得た二つの敷地は僅か数米の幅で繋がり、それぞれ独立した道に面していた。図に示すように両敷地を繋げるパサージュには各棟の住居群のエレベーター、階段室が設けられ、このパサージュは中庭的な露地と共に二つの道を繋いでいる。そしてパサージュは早朝から夜10時まで是一般の人々にも解放されている。セキュリティコンシャスな、例えば米国の都市では考えられないプランなのだ。しかしヒルサイドテラスも含めて、この数十年間、セキュリティに関するトラブルは全くない。ヒルサイドウエストの小さなコートでは特に土曜の昼下り、地下のレストランでウェディング・パーティーが行われているときは新郎新婦の記念写真のシーンも珍しくない(図7)。

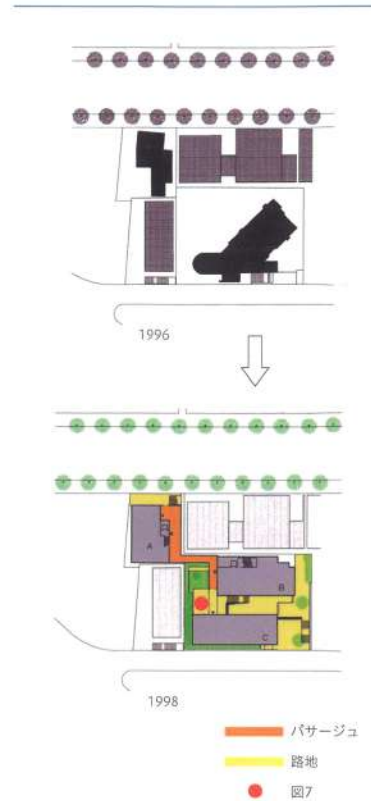


図6



図7



図8 GATE SQUARE 小杉陣屋町



サンハイツ金沢八景



リーフィアレジデンス等々力

この稿の冒頭で、私は都市も建築も究極はそこに住み、働く人々の求める空間秩序が具体化したものであると述べた。竹中工務店の一連の集合住宅群、そしてヒルサイドテラスもそうした希望の具現化であり、それらのよいかたちでの集積があればある程、豊かな町の表情をみせて呉れるのだ。

それでは、日本の都市、例えば東京という町のDNAは何であるのかを考えることがある(註2)。先に東京は他のメトロポリスと比較したとき、安全な町であるといったが、安全に加えて穏やかさが東京のDNAではないかと私は思うのだ。勿論、新国立競技場設計コンペのように突然UFOが舞い降りたような奇抜な物象が現れる可能性は全く否定することは出来ないが、私はこの二年間に、ソフィア、ウィーン、バ里、紐育、ダッカ、デリー、ジャカルタ等の重要首都を訪問していることは、東京ではどこの町よりも群集、或いはタクシー、商店のふるまいにおいても心が静まる穏やかさが存在することを感じるが多い。まちの中に一つ一つ丁寧に、しかしコクのある建築群をつくってきた竹中工務店の住まいづくりの哲学は見事にそこで重なりあうのではないだろうか。

註1 「日本の都市から学ぶこと」(バリー・シェルトン著・片木篤訳 鹿島出版会 2014年)

註2 『都市のDNA』 公研 2015 10月号において東京のDNAの一つ、穏やかさについて詳しく述べている。

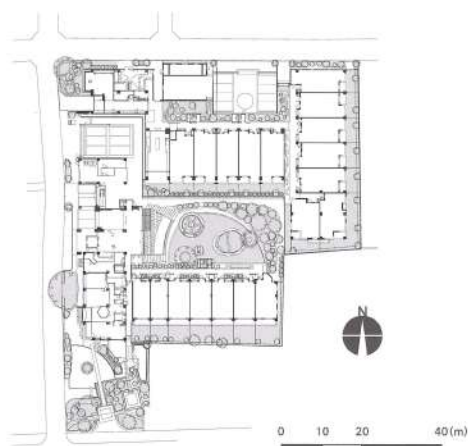
楨 文彦 まきふみひこ 建築家

1928年東京生まれ。1952年東京大学工学部建築学科卒業、クランブルック美術学院およびハーバード大学大学院建築修士課程修了。スキッドモア・オーウイングズ・アンド・メルル、セルト・ジャクソン建築設計事務所、ワシントン大学、ハーバード大学を経て、1965年楨総合計画事務所を設立。1962年・1984年日本建築学会賞(作品)、1993年プリツカー賞、1993年UIAゴールドメダル、1997年村野藤吾賞、1999年高松宮殿下記念世界文化賞、2001年日本建築学会大賞、2011年AIAゴールドメダル、2013年日本芸術院賞・恩賜賞、2013年文化功労者





江戸時代から続く旧家の「地域の歴史・景色を後世に残すプロジェクト」である。建物外観は、旧母屋の瓦屋根・黒漆喰の壁と庇軒裏のケヤキの風合いをモチーフとし、賃貸棟と分譲棟を中庭を囲うように配置した。





風景をデザインする

周辺環境や街並みとの親和性を大切にしながら、地域の風景を創出すべく住まいの空間をデザインすることは、特にまとまった規模の集合住宅を計画するときには重要な視点となる。

例えば都心近くの古い邸宅街の、歴史を重ねた閑静な佇まいの一角が、所有者が変わって建物も敷地内に長年あった樹木も一切が取り払われ、ミニ開発されているような場所が今多く存在する。そのような場所へ新しく集合住宅の設計を依頼されるとき、その街のよさを正しく理解した上で、何をしなければならないかを考える。周辺の建物の大きさや高さ、庭の広さや緑の量に少しでも呼応するようなヴォリュームへの分節、歴史に培われて味わいの出ているそれぞれの材料への調和など。ゲニウスロキも感じながら、その場所にしか発想できないものをつくりたい、というのが設計者の意志でもある。

「GATE SQUARE小杉陣屋町」(2015年)の計画地は、かつて江戸へ物資を運ぶ人馬の往来栄えた中原街道沿いにあった旧家の敷地で、いまは川崎市重要歴史建物として川崎市立日本民家園に移築された母屋のあったその歴史的景観の名残を留めていた。敷地内に遺された高さ20mにも及ぶ既存樹、神社、陣屋門、土蔵を主役として、灯籠や景石も現代の感性で甦らせながら、かつての街道が栄えたことを偲んで、この地域の歴史と景観を後世に遺したいとの建築主の想いを実現するお手伝いをさせていただいた。もとより建物はその背景として、その存在を主張せず、庭の緑や外構計画に馴染むように瓦や漆喰をイメージした外装でシンプルに仕上げ、風景に溶け込むことを意図した。

旧母屋から着想したエントランスの大庇、バルコニー先端や手摺のディテールが強調するのびやかな水平ラインが主役を一層引き立て、通りを行き交う人に開かれた歴史展示ギャラリーのショーウィンドーがこの街の歴史を語る。伝統を受け継ぎ、この街らしさの景観を醸成する建物として、地域に親しまれ愛され続けることを願っている。

「アイランドタワースカイクラブ」(2008年)は、博多湾の新しい埋立地・アイランドシティのシンボルに相応しい計画として、住戸プランや構造システムの新しいあり方を追求し、都市居住の可能性に挑戦した超高層集合住宅である。1辺20mの平面形を持つ住棟3棟を空中で連結するというユニークな構造形式が、地震の多い日本では稀なアスペクト比1:7というプロポーションを可能にした。この平面構成は、超高層集合住宅でありながらも、すべての住戸が角部屋で2面採光



GATE SQUARE 小杉陣屋町

〈神奈川県 2015年〉

土地の記憶を継承するために、既存樹木を移植し、神社や門、土蔵を残すと同時に、緑豊かな敷地に馴染むシンプルな外装デザインを行った

